

わたしの聖戦

ジハード
女性が
働くこと

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連載
207

終の住処はどこに？

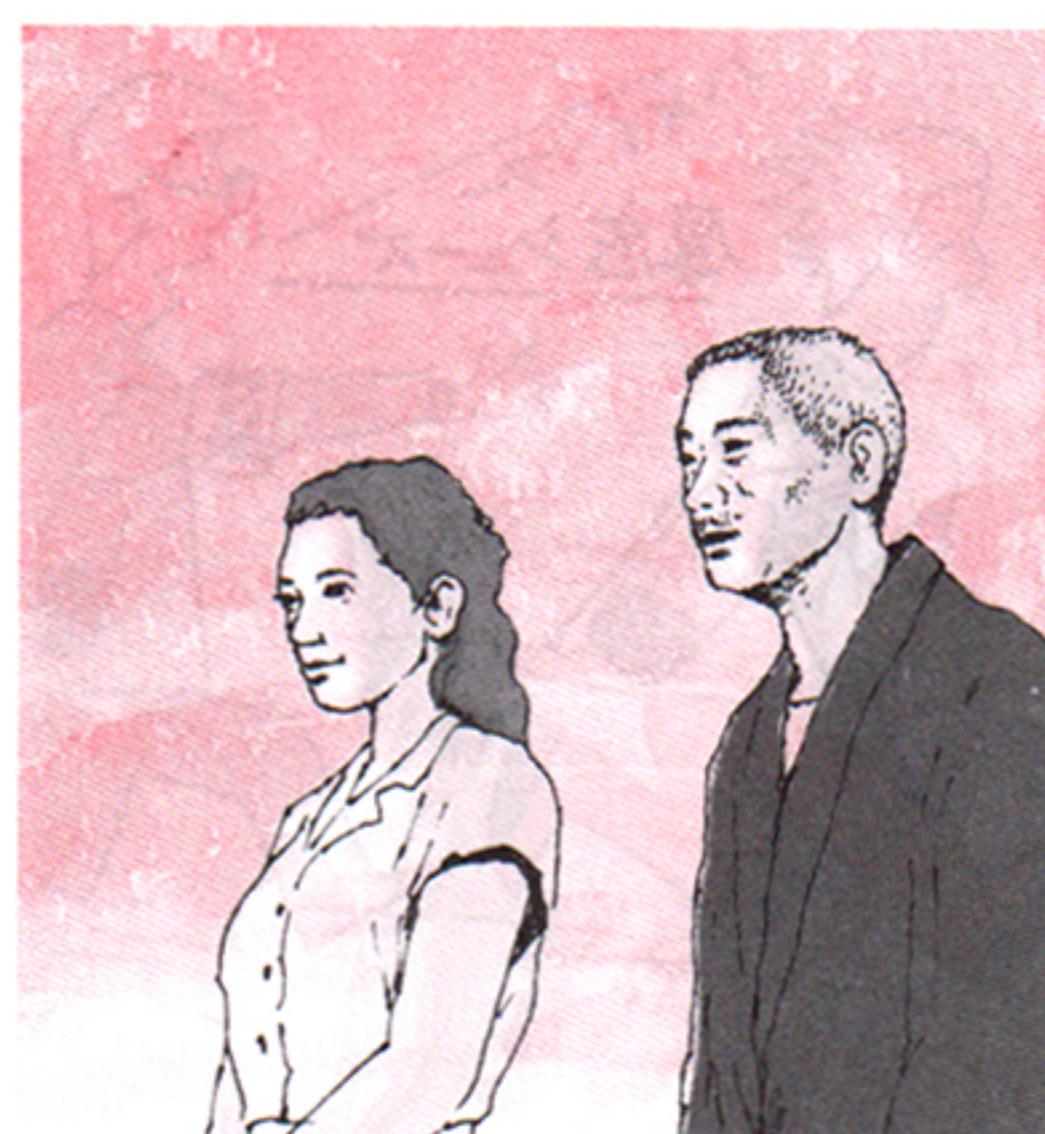
小津安二郎監督「東京物語」は、公開から半世紀を超えた今でも、名作として世界中にその名が衆知されており、海外の映画製作陣に与えた影響は極めて大きい。

老夫婦が、上京して子どもたちを訪ねるもの、皆それぞれのこと忙しくて素気ない。ひとり原節子演じる、戦死した次男の妻だけがふたりに優しくしてくれること……。

東京から故郷の尾道に帰る途中、老夫婦は熱海で一泊する。現在、熱海のシンボルとなっている熱海城はまだそこにはなく、何もない堤防に座つて海を見つめる老夫婦の姿がどこか物哀しい。そ

治療を受ける。人生100年その繰り返し。医療の発展のおかげで、治らない病気が治るようになり、再び日常生活を送れることになった恩恵は大きい。結果、日本は世界でも有数な長寿国になつた。

しかし弊害もある。そ



の願いを受け止める格好で、ここ数年は在宅ケア、在宅ホスピスなどの言葉が常套化し、自宅で最期を迎えるよう医療の仕組みを変えようとしている。もちろんそこには、国民医療費の高騰を抑え目的があるので、と

もあれ、最期をどこで迎えるかを国全体で考える姿勢は前向きといえる。

だからといって、自分がごく普通の時代だったのかとしみじみ考えさせられる場面である。

映画の公開年は1953年。私もまだこの世にいない。それから60余り経ち医療は格段に進歩し、人生の終焉のあり様はさま変わりした。具合が悪いと思えば病院へ行き、徹底的に検査をして診断が下され、標準的な

治療保険制度が変わり、ここ10年で定着した緩和ケアも終の場所ではなくなつた。いつたい私たちはどこでどんな風に最期を迎えたら良いのか、その答えは誰も示してくれない。

生きることは素晴らしい。そう考えているからこそ、最期の締めくくりも納得できるものでありたいと心から思うのである。

イラスト・伊藤栄章

とではあるが、なんだか慌ただしく、静かな死・最期には程遠い風景が繰り広げられる。